ふみあと

新たなる地平へ

第35回全国総会を終えて

2年に一度の総会が終了し、新役員が選出された。会長が5歳、理事長が14歳、事務局長が18歳と全体的に若返った。会員数が減少しつつあり、前途多難な船出ではあるが、保険業法の改悪、自然災害や地球温暖化の脅威、そしてコロナ禍を乗り越え、登山文化をますます発展させる決意を労山全体で共有したい。かたや、1931年以前に生まれ、90歳を超える会員が全国に23名（このうち100歳が1名）在籍されている。山の仲間として大先輩がご健在であることは私たちの大きな励みである。総会資料集にも紹介しているので、ご確認いただくとともに皆様のご健勝を共に祝いたい。

安全登山IX

日進月歩で進化する登山器具の使用方法、高齢化による体力・筋力の衰えなど、多方面から対策を検討しているが、事故件数はなかなか減少しない。今年はすでに4名の死亡事故報告が届いた。抜本的な遭難対策として、やはりリーダーや指導者教育の必要性を痛感している。

安全登山のためには、頭の機能の使い方に工夫がいるのではないかと最近感じている。例を挙げるなら、目や耳に入る情報量増加への対応が挙げられる。以前は新聞・雑誌・ラジオ・テレビぐらいが情報源だったが、今はIT機器を通して情報が溢れている。しかし、忘れられがちだが、情報を活かすには複雑な状況に応じて適切な選択をする判断力が必要になる。

また、登山に必要な体力・筋力を鍛えれば安全が担保できるかと言えば、確かにレベルの高い山行が可能になる側面はあるものの、危険要素は体力に反比例して減少するわけではない。筋力があっても、情報量が多くても、判断を間違えれば命取りになりかねない。判断力を育てるには、一人よりも組織で取り組む方が効果的である。私はダブルチェックを日常生活に取り入れており、家や車のカギは二人で確認するのを習慣としている。同じように山行計画書も会・クラブの山行管理者だけでなく、参加者全員で必ず確認するよう、習慣化していただきたい。事前の計画書確認と下山連絡が組織登山者の安全登山に関する大きな特典だと考える。

（川嶋高志／日本勤労者山岳連盟　理事長）

Footprints